

リーディングスキルテストの共同研究



国立情報学研究所社会共有知研究センター長
情報社会相関研究系教授

新井紀子氏



筑波大学
ビジネスサイエンス系准教授

尾崎幸謙氏



東京都立大学
人文社会学部准教授

登藤直弥氏

はじめに

リーディングスキルテスト（RST）とは、生涯学び続けることが求められる変動の時代の基本スキルである汎用的基礎的読解力（リーディングスキル：RS）を測るためのテストです。このテストは、コンピュータ上の調査（CBT）で実施され、主述関係の読み取り（係り受け解析）や、新しい概念の理解（具体例同定）など、6タイプからなる基礎的読解スキルを測定します。とだっ子が更なる学力向上を目指せるよう、すべての能力を支えるRSを、様々な教科の学習を通じて育む必要があります。

■ 本年度の戸田市リーディングスキルテストと県学力調査の結果から

戸田市でのRSTの実施は平成28年度に開始し、7年目に当たる本年度は、小学校4校、中学校2校が受検しました。本稿では、本年度のRSTと埼玉県学力・学習状況調査（以下 県学調）の結果の関係について新しい分析結果を報告します。RSTと県学調は毎年実施しているため、1人1人の子どもの得点の変化を追うことができます。本年度の分析は、RSTの得点の伸びが、県学調の得点と関係するか否かを調べるものです。

（1）DEP^(注1)の伸びと県学調の関係（国語）

以下の表1は中1（令和3年）から中2（令和4年）にかけてのRSTのDEPの成績の伸びと、中2の県学調との関係を表したものです。表1の数値を説明する前に、結果をご理解頂くために必要な説明をします。

表1の「漢字以外」は漢字に関する設問を除いて国語の合計点を求めた場合を表します。これはRSと漢字等の知識問題にはあまり関係がないことが想定されるからです。「読み」は国語の全問題のうち読みに関する問題の合計点を求めた場合です。新学習指導要領では、児童生徒が学校教育において身に付けるべき力を3つの観点に分類しています。そのうちの2つが「知識・技能」と「思考力・判断力・表現力等」です。「知識・技能」は知っていることやできることを指し、「思考力・判断力・表現力等」は論理的に物事を考えて周囲と協力しながら問題解決する力を指します。表1の「知識」と「思考」は、国語の全問題のうち「知識・技能」と「思考力・判断力・表現力等」を表す問題に関して合計点を求めた場合です。

表1：RSTの伸びと県学調（国語）の関係

	漢字以外	読 み	知 識	思 考
係 数	0.848	0.604	-0.165	0.576
満 点	27	7	16	11

分析ではすべての生徒のデータを使うのではなく2つの限定を行いました。1つめは、中1時点の国語の成績が上位25%の生徒を除いたことです。2つめはDEPの解答数が20以下の生徒に限定しています。これは、DEPの解答数が20以上の場合、RSTの成績の低下がみられるためです。設問をしっかりと読まずに、とにかくたくさんの問題に解答することに注力した生徒の能力値測定は正しく行うことができていると考え、解答数が20以下の生徒に限定しました。

(注1)：RSTで示される6つの観点の1つ。「係り受け解析」ともい、「誰が(何が)」「何を」「どうした」という文の基本構造を正しく把握する能力。

表1の「漢字以外」の0.848は、中1時点で「漢字以外」の得点が同じ生徒のうち、DEPの偏差値を1年間で5以上高めた生徒と、5以上高めることができなかった生徒とでは、前者の生徒の方が中2時点の「漢字以外」の得点が平均的に0.848点高いことを意味します。表1を見ると、DEPの成績が伸びることは「漢字以外」の得点に対して最も関係があるように思えますが、「漢字以外」は満点が27であるため0.848点は大きな値ではありません。最も関係があると考えられるのは「読み」です。DEPの伸びは「読み」に対して統計的に有意な（偶然とはいえ）関係があることが分かりました。また、有意ではありませんでしたが、DEPの伸びは「思考」に対してもプラスに働く可能性が示唆されました。ここから、読解力の中でも最も基本的な文節の関係を正しく理解する能力が、「思考力・判断力・表現力等」という高次の能力を伸ばすことに寄与する可能性があるといえます。なお、表1と表2の有意な数値には*を付してあります。*が付されていない数値は有意とはいえず、関係があるとはいえないと解釈されます。

(2) DEPの伸びと県学調の関係（数学）

以下の表2に記載されているのは、(1)と同様の分析を県学調の数学の得点を対象に行った結果になります。表中の数値が意味するところなどは基本的に表1と変わりありませんが、以下ではもう一度それらの内容を確認しながら、結果について説明していきたいと思えます。

表2：RSTの伸びと県学調（数学）の関係

分析対象	数と式	図形	関数	データの活用	知識・技能	思考・判断・表現
係数	0.607	0.828*	0.704*	0.457	2.534*	0.023
満点	13	8	6	5	28	4

まず、表2中の「数と式」「図形」「関数」、そして「データの活用」はそれぞれ学習指導要領で数学の「教科の領域」として定められているものです。したがって、表2の左半分には県学調の数学の問題のうち各領域に対応する問題への解答結果（得点）にDEPの成績の変化がどのように関係していたのかを検討した結果が記載されています。ここでも、表1と同じように、たとえば「数と式」の「係数」0.607という値は、中1時点で「数と式」の得点が同じ生徒のうちDEPの偏差値が1年間で5以上高くなった生徒はそうでない生徒に比べて中2時点の「数と式」の得点が平均的に0.607点高いことを意味しています。表2からは、4つの「教科の領域」の全てで「係数」の値は正の値になっておりDEPの成績が伸びることはどの領域の得点に対してもプラスに働くように思われますが、分析の結果、DEPの成績の伸びが統計的に有意な関係があるのは「図形」と「関数」に対してであることが示唆されています。

また、表2中の「知識・技能」と「思考・判断・表現」はそれぞれ学習指導要領における「評価の観点」として定められているものであり、したがって、表2の右半分には県学調の数学の問題のうち各評価観点に対応する問題への解答結果（得点）にDEPの成績の変化がどのように関係していたのかを検討した結果が記載されています。表2からは、特に「知識・技能」において「係数」の値が正の大きな値になっておりDEPの成績が伸びることがこの観点の得点の伸びにプラスに働くことが示唆されています。

これらの結果からは、読解力の中でも最も基本的な文節の関係を正しく理解する能力が数学においては「知識・技能」の学習に寄与しており、その影響は「図形」や「関数」といった領域においてより強くみられることが示唆されたといえるでしょう。

おわりに

本年度は、RSを継続して測定するとともに、RSTの各領域と県学調の関係を調べることができました。今後も、これらの研究蓄積を生かし、効果的な指導方法をみなさんと共に吟味していきたいと考えています。